

市民研究員に聞く！

「研究」なんて聞くと、少し難しそう…と思いませんか。そんなことはありません。
活動はとても和やかで楽しいですよ！市民研究員の皆さんにちょっと話を聞いてみましょう！

石黒さんは、コンテンツ開発のワーキングでした。防災玉手箱のレシピのメニューとして、季節や状況に応じたコンテンツを考えて、レシピと一緒に動画を配布しようなど、想いはふくらむばかり。レシピがいっぱいあるので、先生は、それを使って授業をしてもらい、子どもたちからは、楽しみながら学んで欲しい…というのを考えてきました。

石黒さんを見てみると市民研究所の活動も大変楽しそうでしたが…。

つらいことはなかったです。楽しいことばかりでした。個別のワーキングは、全体会議以外でも結構開催しましたが、ワーキングのみんなに会うのが楽しかったです。同じ目的を持って、同じ方向を向いているのですが、いろんな視点から自分がいかにいいアイデアが出て来たり、自分とは違う意見を知ることができ、たいへん参考になりました。

今後について。

防災玉手箱は、今すぐにも子どもたちの役に立てると思うので、ぜひ実現して欲しいです。私たちのワーキングは、7人なので、ポータルサイトセブンになって、玉手箱を持って学校に行きたいです！

市民研究員
石黒みち子さん



市民研究員
岸 和義さん



参加してみたいかでしたか。

活動期間は1年でしたが、ゼロベースから始めるのではなく、前半は十分に理解を深める課程が用意されていたので、後半のグループワークも安心して取り組むことができました。

岸さんは、地域が防災教育を支援する仕組みを検討するワーキングでしたが。

これからは、防災も子どもが主役となると思います。歴史を語り継ぐランナーとして、スポットライトが当てられようとしています。今までは違う役割分担ですね。学校教育の中で、防災教育をやってもらうには、いろいろが必要で、そのつが地域だと思えます。ですから、最初からコミセンが活躍できるのではないかと目星をつけていました。実際にコミセンを回って、話を聞くことができよかったです。コミセンによっては、目星が当たらないと実感しました。

実は、地域に根ざしたといながらも、個性がないんじゃないか、地域の高齢者のための施設なんじゃないか、というイメージでした。しかし、話を聞くと、子どもたちを含めた地域の人材育成にかなり入り込んでいて、また、必ずしもコミセンの中だけではなく、学校とタイアップするなど、手広く、能動的にやっているな、という印象でした。それなら、防災の分野でもパイプ役が担えるんじゃないかと思いました。

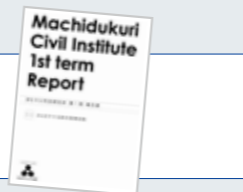
成果報告会を開催しました。

8月23日(土)、まちなかキャンパス長岡4階交流広場にて、本研究の成果の報告会を開催しました。市民研究員から、「ながおか防災を考える日」の実現のため、その趣旨と提案実現のための具体

的施策の報告がありました。この研究成果は、金子長岡市原子力・防災統括監に手渡され、これからの長岡市の施策に役立てていただきます。

報告書はまちキャンで

今回のまちづくり市民研究所第1期の提案内容をより詳しく見たい・知りたい・読みたい方は、まちなかキャンパス長岡に備え付けの報告書をご覧ください！



まちキャン通信号外×まちづくり市民研究所 第1期 報告書 概要版
編集・発行：まちなかキャンパス長岡運営協議会
〒940-0062 新潟県長岡市大手通2-6 フェニックス大手イースト 4F
tel.0258-39-3300 fax.0258-39-3301 HP <http://www.machicam.jp>

まちなかキャンパス長岡
machinaka campus nagaoka



Machidukuri Civil Institute 1st term Report Summary

まちづくり市民研究所 第1期 報告書 概要版 まちキャン通信 号外
まちづくり市民研究所特別編集版

Topic

まちづくり市民研究所 第1期、研究成果まとめりました！

平成25年9月にスタートした「まちづくり市民研究所」。第1期は、「みんなでつくる防災教育体制」をテーマとして、県防災教育プログラムを進めるにあたり、長岡市にあるさまざまな防災資源を活用しながら、教育現場の負担軽減のためどうしたらよいか、この1年間、15名の市民研究員が調査・研究を進めてきました。その結果、「ながおか防災を考える日」の制定を中心とし、それを実現させるためのさまざまな方策を、研究成果として提案します。市民研究員の皆さんの想い、願いのつまった提案をご覧ください。

まちづくり市民研究所とは？

市民の皆さんが、身近な地域課題の解決策を創り出す市民協働プロジェクト。学びで得た知識や経験を活かし、地域社会へ還元するための実践の場。1年をかけて調査、研究を行い、市に提案します。

まちなかキャンパス長岡



まちなかキャンパス長岡
machinaka campus nagaoka

みんなで作る防災教育体制。

第1期は上記をメインテーマとし、さらに、「災害を知らない子どもたちへ、経験をつなぐため、市民参加型防災教育プログラムを構築し、地域の防災力も向上させよう」をミッションとして、調査・研究を進めてきました。防災教育

を学校現場だけに委ねるのではなく、学校と地域とが連携・協働することによる効果を検証し、そこに必要なコンテンツやプログラムを提案します。学校だけではなく地域をはじめ「みんなで作る」防災教育体制です。

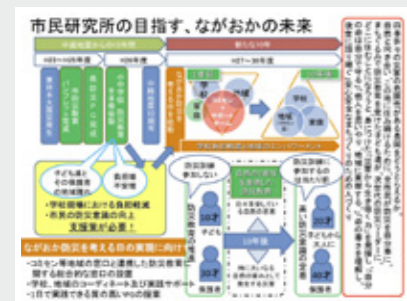
まちづくり市民研究所 第1期 体制

テーマ	みんなで作る防災教育体制	市民研究員	15名(公募、推薦)
研究期間	平成25年9月～平成26年8月	オブザーバー	市教育委員会学校教育課、市危機管理防災本部、(公社)中越防災安全推進機構
所長	羽賀友信 まちなかキャンパス長岡 学長	アシスタント	1名(長岡造形大学 学生)
ディレクター	澤田雅浩 長岡造形大学 准教授	事務局	まちなかキャンパス長岡運営協議会事務局

提案1 「ながおか防災を考える日」

これからの10年に向けて ながおか防災を考える日

「ながおか防災を考える日」を制定し、それを実現するための方策を実施することで、多くのメリットが生まれます。防災教育プログラム実施に伴う学校現場の負担を軽減し、子どもにとっては、より実践的な防災教育の機会を得ることができ、地域や住民との接点が多様になります。また、自主防災組織を含む地域にとっては、実践的な防災訓練等の取り組みを実施でき、学校とのつながりができることで、地域力の向上が見込めます。この取り組みが10年続き、以下のような姿になることを期待します。



「ながおか防災を考える日」の制定から10年後の姿

提案2 防災教育実施時のサポート

コンテンツあふれる玉手箱 ボーサイダーが毎年メンテ

児童・生徒が楽しく防災を学べるコンテンツや、教員の皆さんの防災教育の授業で役立つツール、災害時に身近なもので作れる防災グッズのレシピなど、さまざまなコンテンツの入った「防災玉手箱」を各学校に設置。年に1回、ボーサイダー(安全士等を想定)が学校にうかがい、玉手箱のメンテナンスをしながら、学校や地域の取り組み状況を聞き取り、必要に応じて相談やアドバイスも行います。また、防災グッズアイデアコンテストを開催。子どもたちからもアイデアを募集します。採用されたアイデアは防災玉手箱のコンテンツにも追加します。



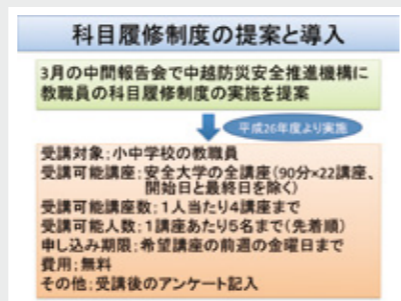
さまざまな防災コンテンツの入った防災玉手箱のメンテナンスをするボーサイダーの役割

提案3 多様な学習機会の提供

中越市民防災安全大学で 教員もスキルアップ

防災教育プログラムが開始されましたが、防災についての経験や防災について学ぶ機会と時間がないのも教員の現状です。そこで、中越大震災以降、地域の防災リーダー育成のため開催している「中越市民防災安全大学」で、教員の皆さんの受講を容易にし、防災のスキルアップを図るため、「科目履修制度」として、そのカリキュラムの希望する一部の講義を受講可能とします。また、中学生の安全大学受講についても検討中です。

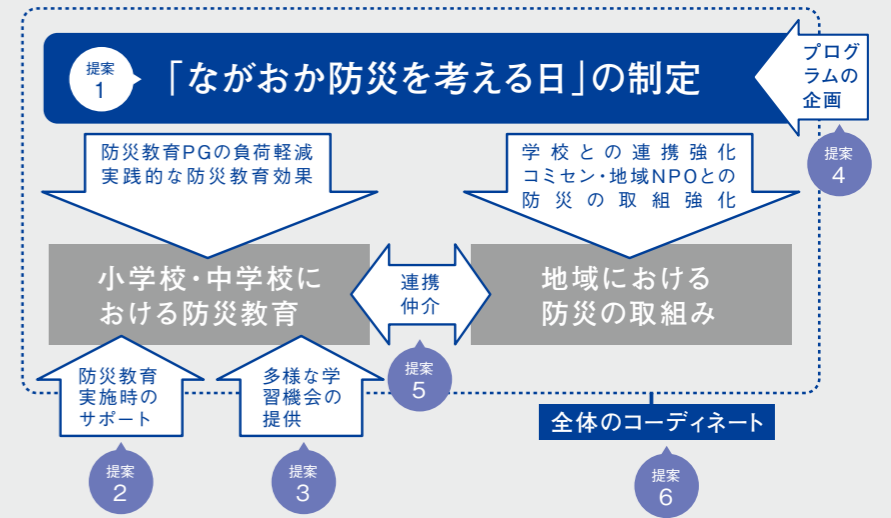
「科目履修制度」については、実施主体の中越防災安全推進機構に提案され、H26.7現在で教員1名の受講があります。



実際に認められ、導入された「科目履修制度」の内容・条件等

コレが、提案の全体像！

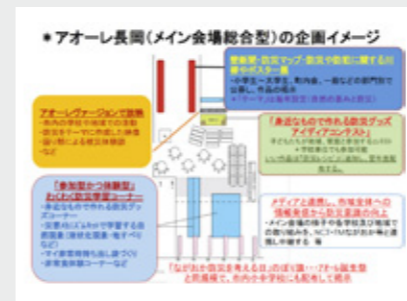
「ながおか防災を考える日」の制定(提案①)を軸に、それを実現するための具体的な方策(提案②～⑥)について提案します。



提案4 プログラムの企画

具体的に、 こんな防災訓練を考えました

防災教育プログラムを踏まえて、学校と地域が協働で実施できる防災訓練プログラムを提案。時刻を定め、家庭で安全確保を行う「ながおかシェイクアウト訓練」や小・中学校単位または合同で行う防災訓練を提案します。また、複数の学校が参加できる防災訓練をアオーレ長岡(メイン会場)で開催。防災に関する座学や体験学習等を開催し、座学では、防災教育プログラムで要請のある課程を、複数校が同時に受講できます。地域では、中越メモリアル回廊などの防災施設を活用した訓練を実施します。



複数校が参加できるアオーレ長岡での訓練開催イメージ

提案5 連携仲介

地域も防災教育をサポート そのパイプ役は、コミセン。

コミュニティセンターは、すでに福祉や文化事業などで学校と地域の調整役を担っています。そこで、防災分野においても、「学校(防災教育)」と「地域(地域防災)」とを結ぶパイプ役として位置付けることにより、防災教育の講師を地域住民や自主防災会が引き受け、サポートすることで、地域の防災関連行事に児童・生徒が参加しやすくなり、地域の活性化につながるなどの効果が考えられます。また、防災の知識や経験の不足するコミセンを補助するためのサポートセンターを設置することで、さらに効果が向上します。



ワーキングのコンセプト。コミセンが学校の防災教育と地域防災活動をつなぐ

提案6 全体のコーディネート

学校も地域も把握 必要です、コーディネーター

この提案の全体を把握しながら、より効果的な防災への取り組みへつなげ、防災を中心としながら、さまざまな組織や地域をつなげていくコーディネーターが必要です。学校と地域のニーズの把握や掘り起こしをしながら、双方にとってよい提案をしたり、動き出すきっかけをつくったりと、コーディネーターは重要な役割を担います。また、コーディネーターが介在することで、実績を蓄積し、教員個人に依存しない継続的な取り組みが可能になります。これによっても教員の負担軽減につながります。



学校と地域が協働する防災教育の推進のイメージ(目指す姿)